



バレーボール 競技公式ルール

Special Olympics





目次

1.	<u>適用するルール</u>	3
2.	<u>公式種目</u>	3
	2.1 <u>ジャグル</u>	3
	2.2 <u>パス</u>	3
	2.3 <u>トスとヒット</u>	3
	2.4 <u>個人技能競技</u>	3
	2.5 <u>チームスキル</u>	3
	2.6 <u>チーム競技</u>	3
	2.7 <u>ユニファイドスポーツ®チーム競技</u>	3
	2.8 <u>モディファイドチーム競技</u>	3
3.	<u>コートと用具</u>	3
	3.1 <u>サービスライン</u>	3
	3.2 <u>ネットの高さ</u>	3
	3.3 <u>バレーボー</u>	3
	3.4 <u>公式コートサイズ</u>	4
	3.5 <u>選手のユニフォーム</u>	4
4.	<u>チーム競技ルール</u>	4
	4.1 <u>ディビジョニング</u>	4
	4.2 <u>リベロ選手</u>	4
	4.3 <u>競技会適用事項（FIVB ルールより）</u>	5
	4.4 <u>ベンチからのコーチング</u>	5
	4.5 <u>基本グラウンドルール</u>	5
	4.6 <u>制裁</u>	7
	4.7 <u>抗議</u>	7
5.	<u>ユニファイドスポーツ®チーム競技ルール</u>	8
	5.1 <u>登録選手およびラインアップ</u>	8
	5.2 <u>コーチ</u>	8
	5.3 <u>サービスオーダー</u>	8
6.	<u>モディファイドチーム競技</u>	8
	6.1 <u>ディビジョニング</u>	8
	6.2 <u>競技会適用事項</u>	8
	6.3 <u>基本グラウンドルール</u>	8
7.	<u>技能競技ルール</u>	9
	7.1 <u>個人技能競技</u>	9
	7.2 <u>その他の競技種目</u>	13
8.	<u>バレーボール技能評価テスト（VSAT : Volleyball Skills Assessment Tests）</u>	19
	8.1 <u>VSAT - サーブ</u>	19
	8.2 <u>VSAT-アンダーハンドパス</u>	20
	8.3 <u>VSAT-スパイク</u>	21
	8.4 <u>VSAT-バンプセット</u>	22



1. 適用するルール

スペシャルオリンピックスのバレーボール公式スポーツルールは、全てのスペシャルオリンピックスバレーボール競技において適用される。国際的なスポーツプログラムとして、スペシャルオリンピックス(SO)は国際バレーボール連盟(FIVB)のルール(参照：<http://www.fivb.org/TheGame/Rules.htm>)を基に、スペシャルオリンピックス公式スポーツルールを定めた。スペシャルオリンピックスのバレーボール公式スポーツルールおよびスポーツルール総則-第1章と矛盾する場合以外はFIVBあるいは国内競技団体(NGB)のルールが採用される。矛盾する場合は、スペシャルオリンピックスのバレーボール公式スポーツルールが適用される。

参考：スペシャルオリンピックス スポーツルール第I章 総則

http://www.son.or.jp/pdf/athlete/program/rule/general_rules.pdf

行動規範、トレーニング基準、医療および安全面の必要条件、ディビジョニング、表彰、上位レベルの競技会への進出条件とユニファイドスポーツを参照してください。

2. 公式種目

これらの種目は、あらゆる競技能力のアスリートに競技する機会を提供することを目的としている。各国プログラムは提供する種目、および必要に応じて、それら種目の運営方針を決定することができる。コーチは、それぞれのアスリートの技術と興味に応じて、適切なトレーニングの提供と種目を選択することに責任がある。

以下はスペシャルオリンピックスにおける公式種目の一覧である。

- 2.1 ジャグル
- 2.2 パス
- 2.3 トスとヒット
- 2.4 個人技能競技
- 2.5 チームスキル
- 2.6 チーム競技
- 2.7 ユニファイドスポーツ®チーム競技
- 2.8 モディファイドチーム競技

3. コートと用具

3.1 サービスライン

- 3.1.1 サービスラインはネットに近づけることが出来るが、センターラインから少なくとも 4.5m は離れていなければならない。

注：スペシャルオリンピックスの世界大会においては、変更はない。

3.2 ネットの高さ

- 3.2.1 男子及び男女混成 : 2.43m
- 3.2.2 女子 : 2.24m
- 3.2.3 ユニファイドスポーツ®競技 :
 - 3.2.3.1 男子及び男女混成 : 2.43m
 - 3.2.3.2 女子 : 2.24m

3.3 バレーボール

- 3.3.1 ボールはより軽量で、レザー仕様の改良されたものを使用出来る。
- 3.3.2 ボールは、円周 81cm 以下、重量 226g 以下
- 3.3.3 公認球の規格になるべく近いものであること



- 3.3.4 スペシャルオリンピックスの世界大会では指定された標準規格ボールのみ使用される。 公
- 3.4 式コートサイズ
- 3.4.1 118m×9m とし、コートの全周囲に最低 3m 幅のフリーゾーンを設ける。
- 3.4.2 スペシャルオリンピックスの世界大会では、サイドラインから最低 5m、エンドラインからは最低 8m のフリーゾーンを設ける。
- 3.5 選手のユニフォーム
- 3.5.1 選手のジャージには 1～99 の番号が付いていなければならない。スペシャルオリンピックス世界大会の場合、選手のジャージには 1～20 の番号が付いていなければならない。
- 3.5.2 胸の番号は、最低高さが 15cm、背中中の番号は、最低高さが 20cm なければならない。
- 3.5.3 要求されてはいないが、チームキャプテンはジャージの胸の番号に下線を 1 本付けること が奨励されている。
- 3.5.4 ジャージ（シャツ）、パンツ、ソックスの色とデザインは、チーム内で統一されていなければならぬ（リベロ選手は除く）。ユニフォームは清潔でなければならない。

4. チーム競技ルール

4.1 ディビジョニング

- 4.1.1 ヘッドコーチは、競技会の前にバレーボール技能評価テスト（VSAT=Volleyball Skills Assessment Tests）の基準に従い、登録している各選手のサーブ、アンダーハンドパス、スパイク、バンプセットの 4 つのスコアを提出しなければならない（このテストは選手、およびチームの評価を行うためのものであり、メダルやリボンを争う競技種目ではない。VSAT に関しては、8. VSAT を参照すること）。
- 4.1.2 ヘッドコーチはコート上で競技能力が高い 6 名の選手を選び、名簿上で名前の横に星印をつける。
- 4.1.3 “チームスコア” は上位 8 名の選手の VSAT スコアを合計し、8 で割った数字を記載する。
- 4.1.4 VSAT チームスコアにより、チームの一次ディビジョニングが行われる。
- 4.1.5 ディビジョニングを決定するためにグループ分けのプロセスが行われる。この過程における提案として以下の 3 点が挙げられるが、これに限定されるものではない。
- 4.1.5.1 ディビジョニングでは、各チームは少なくとも 1 セットの中で 5 分以上プレーを続けるもしくは、10 点先取のセットに参加する。各チームはメンバー全員を出場させなければならない。
- 4.1.5.2 ディビジョニング確定のため、予選リーグを行う。
- 4.1.5.3 競技会責任者は、競技委員会が定めた最低限の時間もしくは得点の範囲で、全登録選手がディビジョニングの試合に参加するよう促すこと。

4.2 リベロ選手

- 4.2.1 どのチームもセット毎に、リベロ選手を 1 名指名することができる。リベロ選手が怪我で続行不可能な場合には、特別ルールが設けられている。各マッチのセット毎のラインナップリストに、6 名のスターティングメンバーの番号と、リベロ選手の番号を記載しなければならない。リベロ選手は、コート上で容易に区別できるように、チームの他のメンバーのユニフォームとは異なる対照的な色、もしくはデザインのものを着用しなければならない。
- 4.2.2 リベロプレイの行動制約：リベロ選手は後列のどの選手とも交代することができる。リベロ選手はバック選手としてのプレーのみ許可され、ボールがネットの上端より完全に高い位置にある場合、コート内、およびフリーゾーンを含むどの位置からでもアタックを打ってはならない。どの選手も、フロントゾーンにいるリベロ選手がオーバーハンドパス



で上げたボールは、ネットの上端より高い位置にあってもアタックを打ってはならない。リベロがフロントゾーンより後方で同様に上げたボールの場合は、自由に打つことができる。

- 4.2.3 リベロ選手の交代：リベロ選手がバックゾーンの選手と交代する場合は、選手交代としてカウントされない。また、交代の回数は制限されない。リベロ選手がコートから出る時は、入る際に交代した選手とのみ交代することができる。交代は、試合開始時の副審によるラインナップの確認が終わった後、または主審がサーブのホイッスルを吹く前で、アウトオブプレイの間にのみ認められる。
- 4.3 競技会適用事項（FIVB ルールより）
 - 4.3.1 時間制限がある場合は、各試合 30 分としてもよい。
 - 4.3.2 複数の交代については、以下のように認められる（リベロ選手を除く）。
 - 4.3.2.1 チームに認められている 12 回の交代回数以内であれば、交代による個人の出場回数に制限はない。
 - 4.3.2.2 セットにつき、各チーム 12 回までとする。
 - 4.3.2.3 1 つのポジションへの交代選手数に制限はない。
 - 4.3.2.4 スターティングメンバーの選手は交代後に再びゲーム（試合）に戻ることができるが、セット開始時にいた自分のポジションと同じポジションに入らなければならない。同様に、そのセットで交代した選手も再びゲーム（試合）に戻ることができるが、それまでプレーしていたポジションと同じポジションに入らなければならない。
- 4.4 ベンチからのコーチング
 - 4.4.1.1 コーチは、試合の進行を妨げることがなければ、ベンチを立てて動き回ることが許される。ただし、エンドラインの後ろから、もしくはベンチ反対側のサイドラインからのコーチングは禁止とする。
 - 4.4.1.2 コーチは交代のために選手を誘導することが許される。
 - 4.4.1.3 コーチは、選手交代の要求を出すことが許されている。この要求は、選手がまだ選手交代エリアに入っていないなくても、審判によって認可される。
- 4.5 基本グラウンドルール
 - 4.5.1 選手
 - 4.5.1.1 どの試合も、6 名の選手で開始される。スペシャルオリンピックスの世界大会以外の大会においては試合中に選手が負傷して退場となり、チームが 5 名に減った場合、チームは大会への参加を 5 名で続行できる。ただし、チームが 4 名以下に減った場合にはゲームは失格となる。
 - 4.5.1.2 チームの登録選手は、交代選手を含め 12 名を超えてはならない。
 - 4.5.2 サービス
 - 4.5.2.1 各セットの最初のサーブは、バックライトの選手が行う。その後フロントライトの選手がバックライトに移動する。レシーブから始めるチームは最初のサイドアウトでローテーションをする。
 - 4.5.2.2 反則するまで、もしくはセットが終了するまで、チームのサーブ権は継続する。
 - 4.5.2.3 サーブ権のあるチームが反則した場合、相手チームにサーブ権が移る。ボールを与えられたチームは、時計回りに 1 つポジションをローテーションする。
 - 4.5.2.4 コイントスに勝ったチームは、サーブかレシーブの選択もしくはコートの選択ができる。第 3 または第 5 セットを行う場合、再度コイントスを行い、同様の選択をする。
 - 4.5.2.5 サーブはサービスゾーンより行う。ボールに接触する前にエンドラインを踏んだり、越えたり、またはサイドラインで規定されたサービスゾーンを出た場合は反則となる。



- 4.5.2.6 サーバーは主審のサービス合図のホイッスルから 8 秒以内にボールを打たなければならない。
- 4.5.3 プレー
 - 4.5.3.1 ボールは身体の中の部分で打ってもよい。
 - 4.5.3.2 ネットを越えて相手側コートにボールを返すまでに、チームは 3 回より多くボールに触ってはならない（ブロックでボールに触れた場合は 3 回の内の 1 回にはカウントされない）。
 - 4.5.3.3 ボールプレイ中は、どの部分であってもネットに触れることは反則となる。脚以外の身体の一部がセンターラインを完全に越えたりした場合でも、そのことにより試合に支障が生じないのであれば、反則にはならない。センターラインを片足あるいは両足で完全に越えた場合は反則とみなされる。
 - 4.5.3.4 ボールが天井に当たった場合は、ネットを越えていなければ打ち上げたチームのボールとし、プレーを続行できる。また天井に当たったのが、チームの 3 度目の接触後の場合も同様である。
 - 4.5.3.5 横や後ろの壁に当たったボールはアウトとみなされる。
 - 4.5.3.6 ライン上に落ちたボールはインとみなされる。
 - 4.5.3.7 反則しなければ、どのような方法でサーブを返してもよい（反則なしに強いサーブを返すには、アンダーハンドパスが非常に望ましい）。
- 4.5.4 交代
 - 4.5.4.1 選手は FIVB ルールに従い、ポジションによって交代しなければならない。（ただし、リベロ選手を起用する場合は除く）。
- 4.5.5 得点
 - 4.5.5.1 試合は 3 セット中 2 セット、または 5 セット中 3 セットを先取したチームの勝利とする。プレイオフセットはマッチセットとされ、15 点マッチ、もしくは 25 点マッチを 1 セット行う。マッチセットは 2 点のアドバンテージで 15 点（もしくは 25 点）以上得点したチームの勝ちとなる。15 点セットマッチの場合、どちらかのチームが 8 点を入れた時点でコートチェンジし、25 点セットマッチの場合、13 点の時点でコートチェンジとなる。1 対 1、または 2 対 2 の同セット数の場合、勝敗決定セット（3 セット目、または 5 セット目）を行い、ラリーポイント制でポイントキャップ無しの 15 点を獲得した方が勝利となる。なお、どちらかのチームが 8 点を入れた時点でコートチェンジする。
 - 4.5.5.2 1 セットは最低 2 点差をつけて 25 点を先取したチームが勝ちとなる（第 3、第 5 セットで勝敗を決する場合を除く）。24 対 24 の同点の場合は、2 点差となるまで続行する。予め 3 セットマッチと定められている場合は、3 セット全てで勝敗がつくため、第 3 セットは勝敗決定セットとはされず、25 点までプレーする。
 - 4.5.5.3 一方のチームがサーブを失敗したり、ボールを返せなかったり、あるいはその他の反則を犯したりした場合、相手チームがラリーを勝ち取り 1 点を得る。サーブを打ったチームがそのラリーを勝ち取った場合は、1 点を得た上で続けてサーブを打つことができる。レシーブをしたチームがラリーを勝ち取った場合、1 点を得た上でサーブ権を獲得する。
 - 4.5.5.4 サーブされたボールがネットに触れて相手コートに入った場合はプレー続行とし、レシーブ側のチームは 3 プレーの内に相手チームにボールを返さなければならない。
 - 4.5.5.5 同点の場合、FIVB 国際得点システム（マッチ、セット、得点率に基づく）が適用される。
- 4.5.6 審判
 - 4.5.6.1 審判は、当該ルールの解釈について全権限を有する。疑問がある場合は、大会責



任者が相談に応じるものとする。

- 4.5.6.2 ホールディングの判定は、アスリートの技能レベルに応じてなされる。
- 4.5.6.3 各コートの後方の左の角に、最低 2 名の線審を対角となるように配置する。線審はそれぞれ割り当てられたエンドライン、もしくはサイドラインに対し、ボールがインであるかアウトであるかを判断する責務を持つ。加えて、主審のくだった ネット判定が適当であるかどうかを判断する。試合によっては線審を 4 名起用することも可能である。この場合、エンドラインに 2 名、サイドラインに 2 名配置する。
- 4.5.6.4 審判のレイティング
 - 4.5.6.4.1 各レベルの競技において、考慮すべき最低必要条件がある。各レベルの競技に合わせて、より高いレイティングの審判が望ましい。
 - 4.5.6.4.2 世界大会：
 - 4.5.6.4.2.1 最低必要条件：
全国認定書か、日本バレーボール協会より授与された同等の最高レベル技能レイティング。国際バレーボール連盟の International Arbitr [国際主審] のレイティングが望ましい。
 - 4.5.6.4.3 リージョナルゲーム：
 - 4.5.6.4.3.1 最低必要条件：全国認定書か、日本バレーボール協会より授与された同等の最高レベルレイティングが望ましい。
 - 4.5.6.4.4 国内大会：
 - 4.5.6.4.4.1 最低必要条件：全国認定書か、国内バレーボール連盟 (NGB) より授与された同等のレイティング。もしくは、ジュニアナショナルか日本バレーボール協会より授与された同等のテクニカルレイティングでも可。
 - 4.5.6.4.5 国内大会より下のレベルの競技会：
 - 4.5.6.4.5.1 最低必要条件：審判は全員が日本バレーボール協会より認定 (どのレベルでも可) を受けているものとする。

4.6 制裁

- 4.6.1 軽微な違反行為に対しては、1 回は口頭での警告を与えられ、以降はイエローカードが出される。イエローカードが出された場合、試合中のチーム全体に適用される。イエローカードによる警告後は、サンクションが重くなりレッドカードが出される。レッドカードが出ると、対戦相手に対しペナルティーポイントとサーブ権が与えられる。次にイエローカードとレッドカードが同時に出了た場合はそのセット間の退場となる。最後にイエローカードとレッドカードが別々に出た場合、その試合で失格となる。

4.7 抗議

- 4.7.1 審判の判定に関わるいかなる抗議も認められない。
- 4.7.2 ヘッドコーチのみ抗議が許されるが、次のサーブが許可される前に迅速に行う必要がある。抗議がそのセットにおける最後のポイントに関わる場合、セット間インターバルの最初の 1 分以内に抗議を表明しなければならない。マッチポイントが抗議の対象の場合、マッチポイントのスコアが入って 1 分以内に抗議が記録されなければならない。
- 4.7.3 考慮される抗議は、1) 競技ルールの誤った解釈、2) 当該状況における適切なルール適用に関する審判の過誤、3) 所与の違反に対し課されたペナルティまたはサンクションの過誤のいずれかではなくてはならない。



5. ユニファイドスポーツ®チーム競技ルール

5.1 登録選手およびラインアップ

5.1.1 名簿に記載されるアスリートとパートナーの数は同じでなければならない。

5.1.2 競技に参加するアスリートとパートナーの数はいかなる場合もそれぞれ 3 名の枠を超えてはならない。ゲーム開始後は、以下に挙げるラインアップのみ認められる。

3 名のアスリートと 3 名のパートナー

3 名のアスリートと 2 名のパートナー（負傷または病気の場合）

これに違反した場合は失格となる。

5.1.3 リベロの交代：アスリートはアスリート同士、パートナーはパートナー同士の交代のみ許される。

5.2 コーチ

5.2.1 各チームには、競技中のチームの選手構成と行動に責任を持つ、競技に参加しない成人コーチを含まなければならない。

5.3 サービスオーダー

5.3.1 サーブを行う順序や、サーブ時のコート内のポジションは、アスリートとパートナーが交互となるようにする。

5.3.2 サーバーが連続して 3 点を獲得した場合、そのサーバー側のチームはローテーションをし、次のサーバーに交代してサーブを続ける。

6. モディファイドチーム競技

6.1 ディビジョニング

6.1.1 ヘッドコーチは、競技会の前に登録している各選手のオーバーハンドパス、サーブ、およびパスの 3 つ（VSAT ではなく、個人技能競技種目）のスコアを提出しなければならない。6.1.2

ヘッドコーチはコート上で競技能力が最も高い 6 名の選手を選び、名簿上で名前の横に星印をつける。

6.1.3 “チームスコア” は上位 8 名の選手の VSAT スコアを合計し、8 で割ったものとする。

6.1.4 個人技能競技のチームスコアにより、チームの一次ディビジョニングが行われる。

6.1.5 ディビジョニングを決定するのにグループ分け用のゲームを行う。

6.1.5.1 ディビジョニングのラウンドでは、各チームは少なくとも 5 分以上の試合、もしくは 10 点先取の試合（いずれか早い方）を 1 試合以上行う。

6.1.5.2 各チームはメンバー全員を出場させなければならない。

6.2 競技会適用事項

6.2.1 コートは幅 7.62m、長さ 15.24m に変更してもよい。

6.2.2 ネットの高さは 2.24m 以上とする。

6.2.3 ボールはより軽量で、レザー仕様の改良されたものを使用してもよい。ボールのサイズは円周 81cm、重量 226g 以下とする。

6.2.4 人のサーバーが 3 点続けて得点した場合、そのサーバー側のチームはローテーションをし、次のサーバーに交代してサーブを続ける。

6.2.5 サイドライン上のアンテナは設置したままにしておく。

6.2.6 地区競技会においてのみ、競技オーガナイザーが勝敗決定セットの最中にコートチェンジを行なわいという決定をくだすことができる。

6.3 基本グラウンドルール

6.3.1 前述のセクション 4.5 チーム競技に準じる。



7. 技能競技ルール

7.1 個人技能競技

7.1.1 目的

7.1.1.1 個人技能競技は、競技能力の低いアスリートのために考案されたものであり、すでにゲームに参加することのできるアスリートのための競技ではない。

7.1.2 スコア

7.1.2.1 個人技能競技 3 種目の合計スコアが、アスリートの最終スコアとなる。

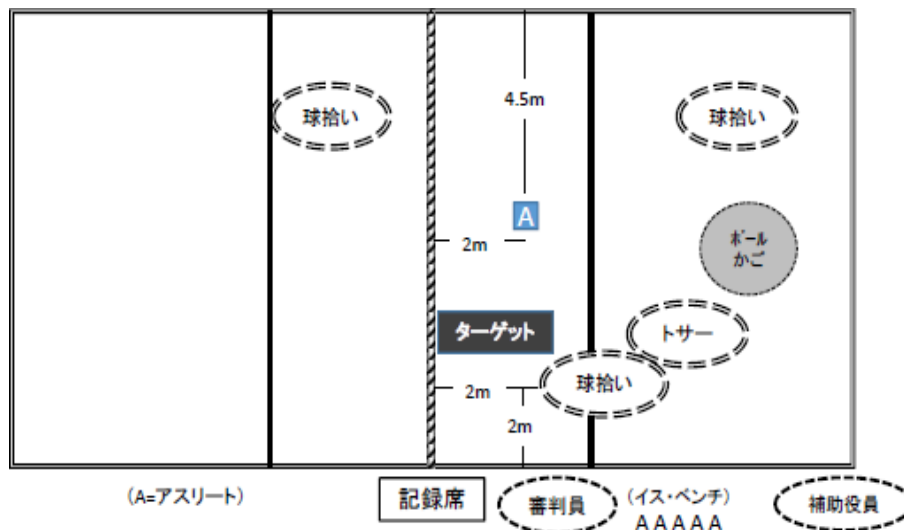
7.1.3 人員

7.1.3.1 各種目の内容は、運営ボランティアの推奨数とその配置と共に図に示されている。また、種目においては公平性を保つために競技中のトサー（球出しを行う人）は同じ人であることが推奨される。

7.1.4 種目

7.1.4.1 個人技能競技は次の 3 種目からなる：オーバーハンドパス（ボレー）、サーブ、パス（アンダーハンドパス）。

7.1.5 個人技能種目 種目 # 1：オーバーハンドパス（ボレー）



7.1.5.1 図の用語

アスリート
審判員
ターゲット
球拾い
トサー
記録席
補助役員
椅子/ベンチ
ボールかご
ネット



7.1.5.2 目的

- 7.1.5.2.1 アスリートのオーバーハンドパスの正確さとスパイクの打てるトスを上げる能力を評価する。

7.1.5.3 用具

- 7.1.5.3.1 長さ 18m、幅 9m の規定サイズコート、バレーボール 4 個（公認球でなくても可）、ネット（女子：2.24m、男子：2.43m）、支柱、アンテナ、ボールかご。

7.1.5.4 方法

- 7.1.5.4.1 アスリートはネットから 2m、サイドラインから 4.5m のセンターフロントの位置で 10 回の試技を行う。
- 7.1.5.4.2 アスリートは、エンドラインから 4m、サイドラインから 3m のコート後方左ポジションに位置するトサーより、両手でアンダーハンドトスされたボールを 10 回受ける。
- 7.1.5.4.3 アスリートは、両手を頭上にあげ、ネットから 2m、サイドラインから 2m のコート前方左のポジションに立っているターゲットに向けてボールをトスする。
- 7.1.5.4.4 トサーからのトスが低く、アスリートがトスできない場合は、やり直しする。目標はそれぞれのトスの軌道の一番高い地点がネットより高く上がるようにすることである。

7.1.5.5 得点

- 7.1.5.5.1 ターゲットへトスされたボールの軌道の一番高い地点が計測される。
- 7.1.5.5.2 アスリートは、自らの頭上 1m の高さにボールを上げれば 1 点、ネットより高く上げれば 3 点を獲得する。
- 7.1.5.5.3 不正な打ち方、頭の高さより低いトス、ボールがネットを越えた、あるいはボールがコートの外に出た場合は 0 点となる。
- 7.1.5.5.4 アスリートの最終スコアは、10 回の試技の合計点になる（高さを評価するため、審判は椅子の上に立つことを推奨する）。



7.1.7.4 方法

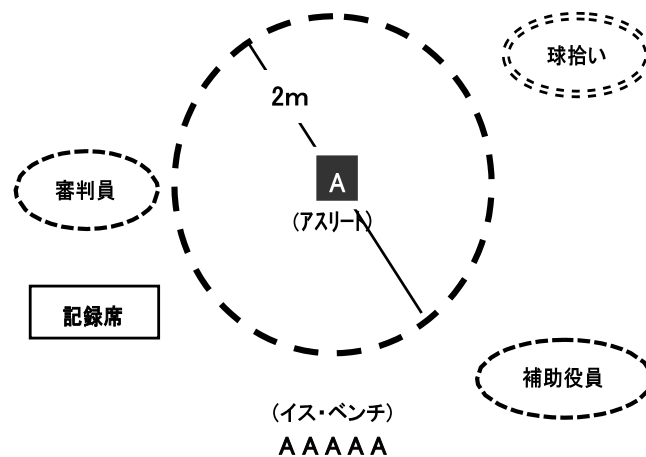
7.1.7.4.1 アスリートはサイドラインから 3m、エンドラインから 1m のバックライトのポジションに立つ。同じ側のコートの前中央のネットから 2m の位置にいるトサー（コーチもしくは審判）が、アスリートに両手でオーバーハンドトスをあげる。アスリートはそのボールをレシーブし、同じコート内のネットから 2m 、トサーと反対側のサイドラインから 4m 離れて頭上に両手を上げて立っているターゲットに向けてパスをする。ターゲットエリアには、エリアごとの得点がフロントコートに表示されている。この種目は、左側サイドラインから 3m、エンドラインから 1m のバックレフトの位置においても、繰返し行う。

7.1.7.5 得点

7.1.7.5.1 最高得点を獲得するためには、少なくともパスの軌道の一番高い地点がネットより高い位置になければならない。ボールがライン上に落下した場合、得点は高い方のエリアの点数を採用する。パスがネットより低い時は、落下した位置にかかわらず得点は 1 点とする。最終スコアはバックライト・レフトそれぞれの位置で 5 回ずつ行った試技の得点を合計した点数とする。各パスの高さを評価するため、審判は椅子の上立つことを推奨する。

7.2 その他の競技種目

7.2.1 バレーボールジャグル



7.2.1.1 図の用語

アスリート
審判員
球拾い
記録席
補助役員
イス／ベンチ

7.2.1.2 用具

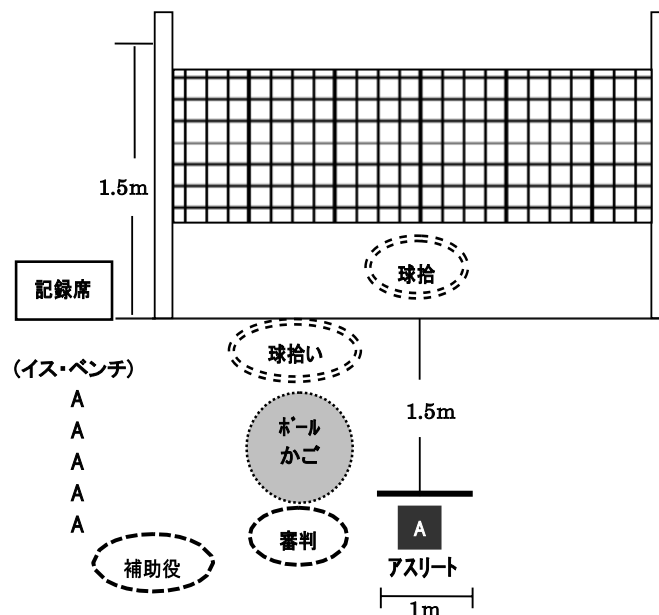
7.2.1.2.1 周囲 60cm のビニールボール、もしくは 81cm の改良されたレザー仕様のバレーボール。ただし重量 226g 以下とする。

7.2.1.2.2 ストップウォッチ



- 7.2.1.2.3 巻尺
- 7.2.1.2.4 ラインテープまたはチョーク
- 7.2.1.2.5 ホイッスル
- 7.2.1.3 準備
 - 7.2.1.3.1 床に直径 2m の円を描いておく。
- 7.2.1.4 ルール
 - 7.2.1.4.1 まずアスリートは円の中央にボールを持って立った状態、もしくは座った状態で始める。
 - 7.2.1.4.2 アスリートはホイッスルの合図で、ジャグリングを始める。
 - 7.2.1.4.3 アスリートは両手、両腕のみ使うことが許される。
 - 7.2.1.4.4 アスリートはボールを床に落とさないようにする。
 - 7.2.1.4.5 最高 60 秒間行う。
 - 7.2.1.4.6 アスリートがボールをキャッチするか落下、もしくは 60 秒が経過した場合、終了となる。
- 7.2.1.5 得点
 - 7.2.1.5.1 アスリートがボールを空中に打ち上げた回数を数える。
 - 7.2.1.5.2 ボールが空中に打ち上げられるごとに 1 点が与えられる。
 - 7.2.1.5.3 60 秒間ボールを床に落とさなかった場合、5 点のボーナス得点が与えられる。
 - 7.2.1.5.4 60 秒間にボールを打ち上げた回数と、ボーナス得点の合計を、最終的な得点とする。

7.2.2 バレーボールパス



7.2.2.1 図の用語

- アスリート
- 審判員
- 球拾い
- 補助役員



記録係

イス／ベンチ

ボールかご

7.2.2.2 用具

7.2.2.2.1 周囲 60cm のビニールボール、もしくは 81cm の改良されたレザー仕様のバレーボール。ただし重量 226g 以下とする。

7.2.2.2.2 ネットと支柱

7.2.2.2.3 巻尺

7.2.2.2.4 ライントープまたはチョーク

7.2.2.2.5 ホイッスル

7.2.2.3 準備

7.2.2.3.1 ネットを 1.5m の高さに張る。

7.2.2.3.2 ネットから 1.5m のところに、長さ 1m のスローイングラインをネットと平行に引く。

7.2.2.4 ルール

7.2.2.4.1 アスリートはスローイングラインの後ろに立った状態、もしくは座った状態から始める。

7.2.2.4.2 アスリートはボールがネットを越えるようにボールを投げる。

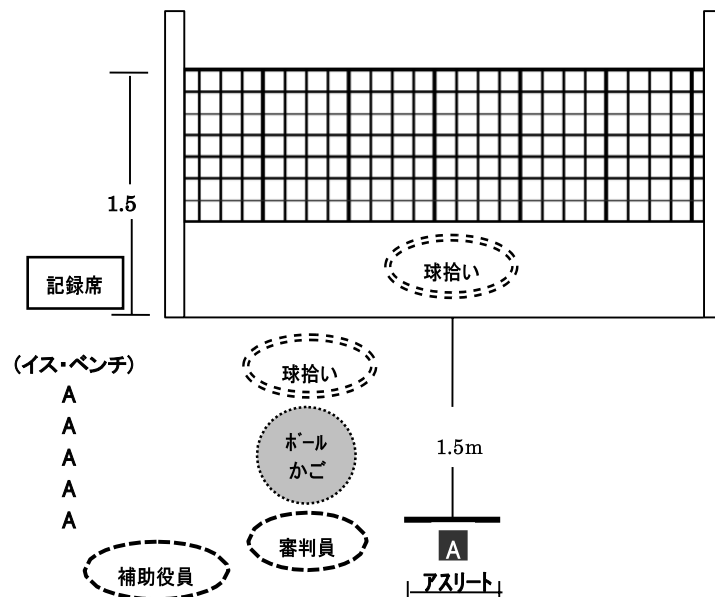
7.2.2.4.3 アスリートはボールを片手あるいは両手で投げてよい。

7.2.2.4.4 ボールがネットを越えるように投げるための 5 回の試技が与えられる。

7.2.2.5 得点

7.2.2.5.1 ボールがネットを越すごとに、1 点が与えられる。

7.2.3 バレーボールトスとヒット



7.2.3.1 図の用語

アスリート

審判員

球拾い



補助役員
記録係
イス／ベンチ
ボールかご

7.2.3.2 用具

7.2.3.2.1 周囲 60cm のビニールボール、もしくは 81cm の改良されたレザー仕様のバレーボールを 5 個。ただし重量は 226g 以下とする。

7.2.3.2.2 ネットと支柱

7.2.3.2.3 巻尺

7.2.3.2.4 ラインテープ

7.2.3.2.5 ホイッスル

7.2.3.3 準備

7.2.3.3.1 ネットを 1.5m の高さに張る。

7.2.3.3.2 ネットから 1.5m のところに、長さ 1m のスローイングラインをネットと平行に引く。

7.2.3.4 ルール

7.2.3.4.1 アスリートは、スローイングラインの後ろに立った状態、もしくは座った状態で始める。

7.2.3.4.2 アスリートは、ボールがネットを越えるように、1 球ずつ、合計 5 球打つ。

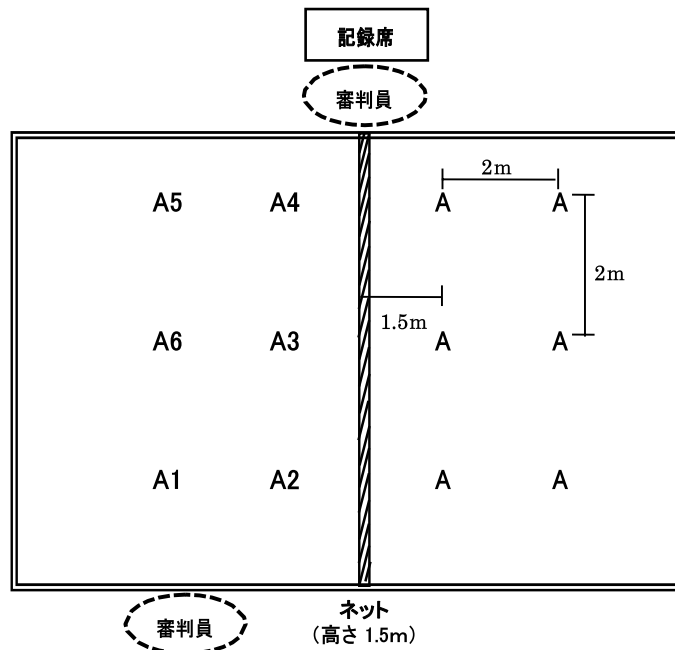
7.2.3.4.3 アスリートは、ボールを片手または両手で打ってよい。

7.2.3.4.4 アスリートは、ボールがネットを越えるように 2 回試打することができる。

7.2.3.5 得点

7.2.3.5.1 ボールがネットを越すごとに 1 点が与えられる。

7.2.4 チームスキルバレーボール





- 7.2.4.1 図の用語
 - 審判員
 - ネット
 - 記録係

7.2.5 用具

- 7.2.5.1 規定または改良されたレザー仕様（周囲 81cm、重量 226g）のバレーボールをチーム毎に 2 個。長さ 18m、幅 9m の標準コート、1.5m の高さにセットされた支柱とネット、巻尺、ラインテープまたはチョーク、ホイッスル

7.2.6 準備

- 7.2.6.1 図に示されているように、6 ヶ所に印をつける。アスリートは 2m 間隔で位置につく。フロントラインのアスリートは、ネットから 1.5m 離れる。バックラインのアスリートはフロントラインのアスリートから 2m 離れる。
- 7.2.6.2 各チームはゲーム前に選手登録名簿を提出する。
- 7.2.6.3 アスリートは番号のついたユニフォーム、またはシャツを着用する。

7.2.7 ルール

- 7.2.7.1 各チーム 6 名ずつ、2 チームがネットを挟んで位置につく。
- 7.2.7.2 ゲームは 6 ラウンドからなる。アスリートたちは、ゲーム中に 6 つの全てのポジションにつく機会を与えられる。ゲームに勝つためには、3 ゲーム中 2 ゲームを先取しなければならない。なお、競技委員長はゲーム数を変える権限をもっている。
- 7.2.7.3 審判が#1 のポジションにいるアスリートにボールを渡し、ホイッスルの合図でゲームを開始する。
- 7.2.7.4 #1 のポジションにいるアスリートは、#2 のポジションにいるアスリートにパスをし、#2 のポジションにいるアスリートは、ボールを相手コートに入れるように打つ。
- 7.2.7.5 相手チームはボールを打ち返すことが認められる。サーブしたチームはこのボールを打ち返してはならない。
- 7.2.7.6 もしレシーブ側がボールを落としたり、相手コートに打ち返すのに失敗しても、減点されることはない。
- 7.2.7.7 審判は#6 のポジションにいるアスリートにボールを渡す。#6 のポジションにいるアスリートは#3 のポジションにいるアスリートにオーバーハンドパス（ボレー）をする。#3 のポジションにいるアスリートはボールが相手コートに入るように打つ。
- 7.2.7.8 次に審判は#5 のポジションにいるアスリートにボールを渡す。#5 のポジションにいるアスリートは#4 のポジションにいるアスリートにオーバーハンドパス（ボレー）をする。#4 のポジションにいるアスリートは相手コートにボールが入るように打つ。
- 7.2.7.9 #1、#6、#5 のポジションにいるアスリートからのプレーが終了したところで、1 ラウンド終了となる。
- 7.2.7.10 今度は反対側のコートのアスリートが、#1、#6、#5 の順で同様に行い、プレーが終了したところで、1 ラウンド終了となる。
- 7.2.7.11 次のラウンドが始まる際に、それぞれのチームのアスリートたちは時計回りに次のポジションへローテーションする。
1→#6、#6→#5、#5→#4、#4→#3、#3→#2、#2→#1
- 7.2.7.12 ゲームはアスリートたちがそれぞれ 6 つのポジションを終えるまで続けられ



る。

7.2.7.13 交代は、ラウンドとラウンドの間にのみ許可される。

7.2.7.14 コーチは#1 と#5 の選手から 4m 離れたサイドラインにいないといけない。
口頭での指示やサインを与えることは認められる。耳の不自由なアスリートを
ポジションへ誘導することも認められる。

7.2.8 得点

7.2.8.1 次の場合、サーブチームに 1 点が与えられる。

7.2.8.1.1 バックラインのアスリートから決められたフロントラインのアスリート
へのパスが成功した時

7.2.8.1.2 フロントラインのアスリートがボールを打った時。

7.2.8.1.3 フロントラインのアスリートが打ったボールがネットを越え、インとな
った時。

7.2.8.2 次の場合、サーブチームに 1 点が与えられる。

7.2.8.2.1 ディフェンス側が 2 回以内にボールを返し、インとなった時は 1 点が
与えられる。

7.2.8.2.2 1チームの 6 ラウンドゲームあたりの最高得点は 72 点である。

7.2.8.2.3 ゲームに勝つためには、最低 2 点リードしなければならない。2 点差
がつくまで、追加ラウンドが行われる。



ルを拾い、ボール入れの近くにいる他のボランティアにそのボールを渡す。

8. バレーボール技能評価テスト (VSAT : Volleyball Skills Assessment Tests)

8.1 VSAT - サーブ

3m

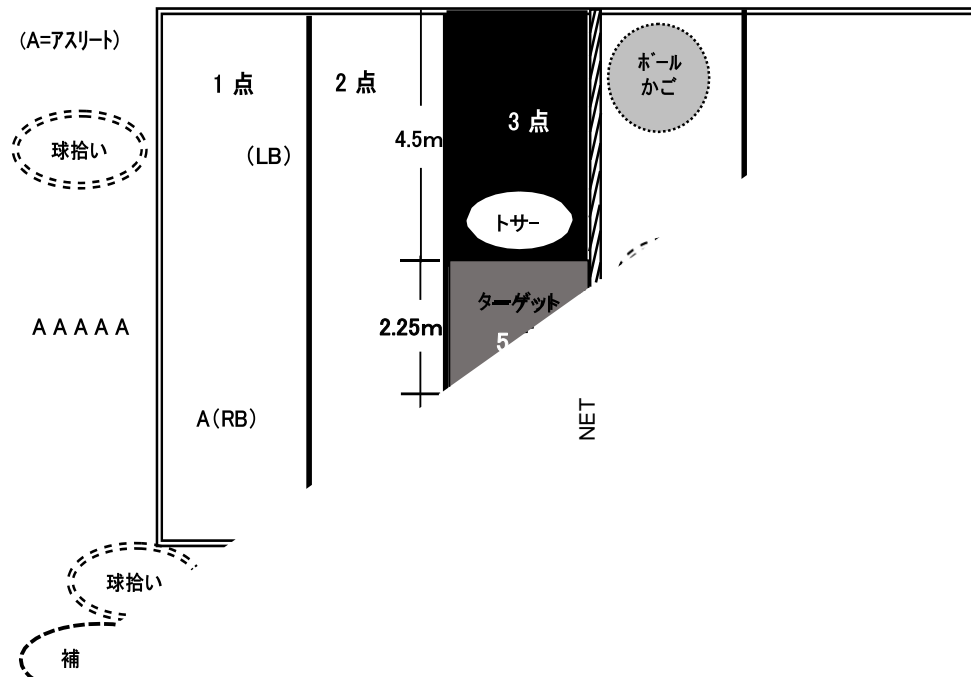
4.2m

1.8m



アスリートがテストを終了したら、ボランティア A はスコアキーパーをしているボランティア D に得点を伝える。各々のボランティアは運営のみを行い、自分の持ち場の仕事だけを行うようにする。

8.2 VSAT-アンダーハンドパス



8.2.1 図の用語

- アスリート
- トサー
- ネットアタックライン
- ポイント
- ボールかご
- LB (後方左)
- RB (後方左右)

8.2.2 目的

- 8.2.2.1 アスリートのアンダーハンドパスの正確さ、高さ、確実さの能力を評価する。

8.2.3 用具

- 8.2.3.1 長さ 18m、幅 9m の規定サイズコート、バレーボール 5 個(改良されたボールも使用を認める)、ネット (女子: 2.24m)、男子: 2.43m)、支柱、アンテナ、巻尺、ラインテープまたはチョーク、マーキングテープ、ボールかごを使用する。

8.2.4 方法

- 8.2.4.1 アスリートは右サイドラインから 3m、エンドラインから 1m のバックライトのポジションに立つ。同じ側のコートの前列中央のネットから 2m の位置にいるトサー (コーチもしくは審判) が、アスリートに両手でオーバーハンドトスをあげ

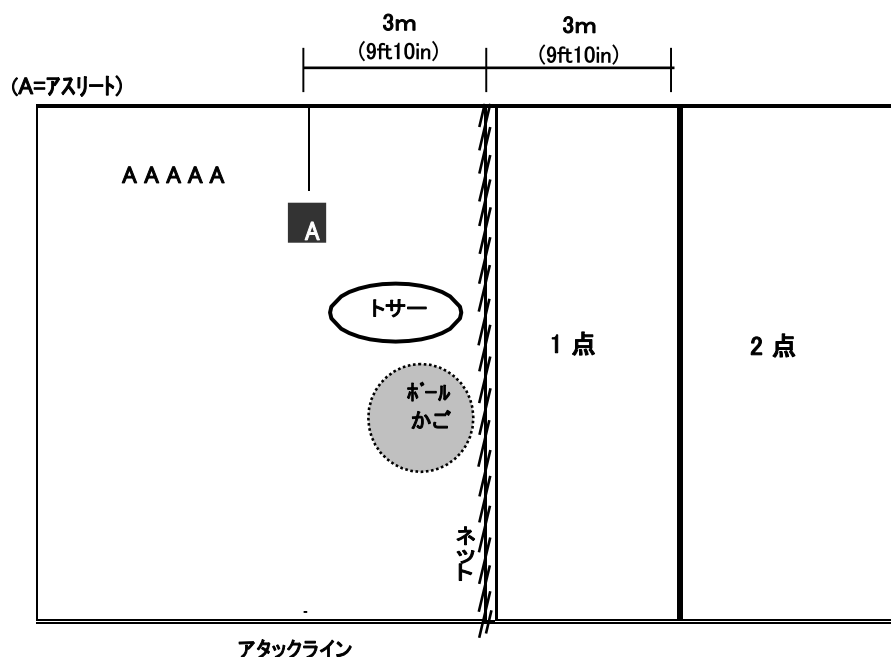


る。アスリートはそのボールをレシーブし、同じコート内のネットから 2m、トサーと反対側のサイドラインから 4m 離れて頭上に両手を上げて立っているターゲットに向けてパスをする。ターゲットエリアには、エリアごとの得点がフロントコートに表示されている。この種目は、左側サイドラインから 3m、エンドラインから 1m のバックレフトの位置においても、繰返し行う。

8.2.5 得点

- 8.2.5.1 最高得点を獲得するためには、アスリートは少なくともパスの軌道の一番高い地点がネットより高い位置になければならない。ボールがライン上に落下した場合、得点は高い方のエリアの点数を採用する。パスがネットより低い時は、落下した位置にかかわらず得点は 1 点とする。最終スコアはバックライト・レフトそれぞれの位置で 5 回ずつ行った試技の得点を合計した点数とする。各パスの高さを評価するため、審判は椅子の上に立つことを推奨する。

8.3 VSATースパイク



8.3.1 図の用語

- アスリート
- トサー
- ネット
- アタックライン
- ボールかご
- ポイント

8.3.2 準備

- 8.3.2.1 長さ 18m、幅 9m の規定サイズコート、バレーボール 5 個、ネット（女子：2.24m、男子：2.43m）、支柱、アンテナ、巻尺、ラインテープまたはチョーク、ボールかご。

8.3.3 テスト



8.3.3.1 トサーはアスリートの前方にネットより 2m ほど高いボールをトスする。十分な高さのないトスはやり直す。アスリートはネットから 3.05~4.57m 離れて立ち、スパイクの体勢をとり、反対側のコート内にネットを越えるようにスパイクする。各アスリートは 10 回の試技を行う。

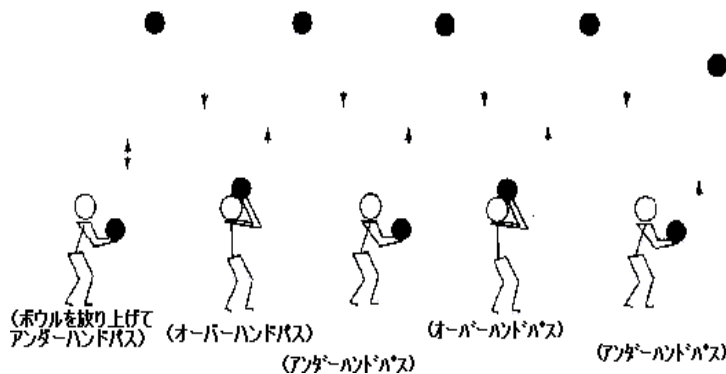
8.3.4 得点

8.3.4.1 アタックラインを越えバックコートに入ったスパイクは 2 点、アタックラインとネットの間のフロントコートに落ちたスパイクは 1 点とする。当たり損ねやハーフスピードのショットはスパイクとは記録されない。アスリートの最終スコアは 10 回の試技の得点を合計して決定される。

8.3.5 配置／役割

8.3.5.1 ボランティアはアスリートのテストを運営することが目的であり、テスト最中はいかなるアスリートの邪魔もしてはならない。ボランティア A はボランティア B が実際のテストでデモンストレーションを行っている間に、グループにこのテストのやり方を説明する。ボランティア C はテストするアスリートにバレーボールをトスする。ボランティアたちは床面に落ちたボールを拾い、ボール入れの近くにいる他のボランティアにそのボールを渡す。アスリートがテストを終了したら、ボランティア A はスコアキーパーをしているボランティア D に得点を伝える。各々のボランティアは運営のみを行い、自分の持ち場の仕事だけを行うようにする。

8.4 VSAT-バンプセット



8.4.1 図の用語

ボールを放り上げてアンダーハンドパス
アンダーハンドパス
オーバーハンドパス

8.4.2 準備

8.4.2.1 バレーボールコートの半面、ネット（最低 2.24m）、バレーボール 3 個

8.4.3 テスト

8.4.3.1 アスリートはアンダーハンドパスとオーバーハンドパスを止めずに交互に行う。

8.4.3.2 アスリートは、まず最初に空中へボールを投げ上げ、それからアンダーハンドパスから始める。

8.4.3.3 アスリートはボールの下に移動し、アンダーハンドパスとオーバーハンドパスを交互に続ける。

8.4.3.4 試技はコートの半面内で行われなければならない。

8.4.4 得点



- 8.4.4.1 アスリートは 4 回の試技が許されており、その中の最高スコアが得点となる。
 - 8.4.4.2 最高得点を 50 点（アンダーハンドパス 25 点、オーバーハンドパス 25 点）とする。
 - 8.4.4.3 ボールがネットの高さを越える適切なパスを上げるごとに 1 点とする。
 - 8.4.4.4 アスリートが 2 回連続して同じパスをしたり、不正確なパスやコートの外でのパスを行ったり、あるいは得点が 50 点を越えた場合に試技は終了となる。
- 8.4.5 配置／役割
- 8.4.5.1 ボランティアはアスリートのテストを運営することが目的であり、テスト中はいかなるアスリートの邪魔もしてはならない。ボランティア A はボランティア B が実際のテストでデモンストレーションを行っている間に、グループにこのテストのやり方を説明する。ボランティア A はテストするアスリートにバレーボール をトスする。ボランティアたちは床面に落ちたボールを拾い、ボール入れの近く にいる他のボランティアにそのボールを渡す。アスリートがテストを終了したら、ボランティア A はスコアキーパーをしているボランティア C に得点を伝える。各々のボランティアは運営のみを行い、自分の持ち場の仕事だけを行うようにする。